

イチゴの表皮

3

LULU

キスツケタイ。。。。

その漢字の肝

会社という場所において、それなりのおじさま達と関わっていると、なかなかどうして普段使わないような言語が出てきて、目を丸くすることがある。

古い言い回しや、ギャグやダジャレ(これについては後日語りたいと思うほどに奥が深かったり、浅かったりするのだけれど)もろもろに、呆れかえるばかりだった20代そこそこだった自分から一転、ちょっと面白いなと思えてきたのは、そろそろおのれにも相応の度量が出来てきた証拠か。

いつとき、わたしの心を驚掴みにしていたのが「やぶさかでない」という言葉。

何この武士っぽい響き。いや、そのココロを紐解くと「やぶさか」が「やぶさめ」に音が似ているからというあまりに短絡的な思考回路に気づき、甚だ遺憾ではあるのですが、意味を調べると努力を惜しまずしますよ、進んでしますよ、といった具合になり、結果「ああ、いいっすよ」みたいな雰囲気ではなかろうかと推測する。

そのいいっすよも、首をすくめるといったやや「仕方なく」寄りではなく、ああいいっすよ、と片手を挙げて賛成の意を表明するといったやや「喜んで」に寄っていくニュアンスを含む様子。

「はいはい、それをするのはやぶさかでないですよ」というとちょっと「それなら安心でしょ」という自信にも似た意味合いを感じ取ってしまうのだけれど、それはやはり「やぶさかでない」といういかつい響きを敢えてチョイスしたことによる心意気を汲み取った結果かと思われる。やや「喜んで」に寄るのはあくまでも「やや」であって、がっつりそこに浸かってはいない。

そして「やぶさかでない」ワールドから離れたわたしは、最近出逢ってしまった！

それは「齟齬」ということば。「そご」と読むのですってよ。なかなか見た目どおりのルビです。

この意味合いは、「勘違い」や「行き違い」ということになるようですが、漢字からは何か上下噛み合わせの悪い歯を想像してしまう。まあこれも見た目オンリーの意見なのでしょう。我ながら単純過ぎて涙出ます。

この場合は文章の中にある「齟齬」にばかりに目がいきつてしまい、本文が全て霞んでしまうという歓迎されない事態を招いていて、今のわたしには使いこなせそうにありません。

やぶさかでないにせよ、齟齬にせよ、意味はぼんやりわかっても、いざ使おうとするときに必要な応用力が乏しいゆえになかなか口からも手からも発信できません。間違っていたら結構恥ずかしいしなあなどという、なけなしのプライドも少々邪魔して、結局使わないという。

それにしても・・・やぶさかでない、ってどういう立場の人がどういう人に使うのが正しいのでしょうか。あんまり女性が口にするところを見たことがない気がするのは、気のせいか・・・。

「えー、会議のお茶だしですかあ、やぶさかじゃないですうー」
歴女か？

「もうっ、それは齟齬を含むんだぞっ」
めっ。

案外いいかも。

一時期、ちょっとした個人的ブームで「ほくそ笑む」というワードを多用していた時期がありました。そのときもまわりの女子からは「何その言葉ー？」と笑われた爽快な思い出があります

。

これは、やぶさかじゃないったり、齟齬ったりすべきでしょうか。今年わたしも。

その長距離の肝。

昨日、部活動だろう。体操着を来た数人のグループが、走っているのが見えた。
いわゆるマラソン、長距離走、走り込みというものだろう。

それこそ、わたしも昔は部活動というものをしている、それなりに体力作りと称したさまざまな運動(基礎体力作り?)をしていたのだけれど、何を隠そうわたしは長距離走が苦手。大の苦手。

さかのぼると、いつも横っ腹がいたくておさえながら走っている自分を俯瞰で眺める自分がある。一度痛い思いをしたらもう最後、それから走る前からもう横っ腹をおさえる自分の姿がまざまざと浮かぶ。

女子同志でよくある光景だけれど、学校で長距離走などという種目が開催されようものならば、「みんな一緒に走ろうね」「置いてっちゃいやよ」「うん」という実にラブリーな会話が交わされるのだけれど、そんな約束は果たされない。

まあ一緒に集団でゴロゴロ走ってもそれこそ迷惑なので別に良いのだけれど、私はそのような場合に「おいて行かれる女子」トップスリーには君臨するほどの鈍足だ。

体育大会など開催されようものならば、部活動をともにしている後輩たちから「先輩がんばって～」と個人的に声援をいただくほど、後続組いや後続人のぼつぼつ金魚のフン状態になるのだ。

というわけで、己の長距離走への苦手意識を克服すべく、早朝から友達と待ち合わせて近所を走るということをしたり(寒い中、手袋とジャージで走りこむ少女。美しかったに違いない)いろいろ抗ってみたもののそんなことでは効果は薄い。

そんな思い出ばかりなのでつくづく思う。

あの頃には戻りたくない……。

あのみじめな金魚のフンには二度となりたくない……。

横っばら痛くなりませんようにと祈ったり(もはや神頼み)、呼吸法を工夫してみたり(完全独自のラマーズ法もどき)いろいろしたけれど、そんなの関係ないのよね、やっぱり。遅いものは遅い。劇的にそんな早くなったら、いまどき「女子高生が一年で俊足になったら」みたいな啓発本(どんな内容?)書いてますわな。ベストセラーで原田知世で映画化ですわ(当時のね)

ともかく、そんな感動的な成長も遂げないまま、気づけばマラソン自体に縁がなくなっていた。ほっ。

そしてつくづく思う。あのころには戻りたくない……。

その指南書の肝。

話題になっている方の話題の本を図書館で借りた。

「借りる」というところからして、お試し感覚なのはぶんぶんなのでありますが、予約取り置きしていますよ、というメール連絡(最近の図書館はネットで予約、メールで連絡!)に、「はて? 予約したのだけ?」とかなりあいまいだったことからしても、まあ話題の本みたいだし覗いてみよう、ぐらいの心持ちだったのは否定しません。

たしかどこかで「今女性を中心に売れている」というロゴを見た気がしますし、ランキングなるものでも時折見かける方の著書ですので、予約してから数か月待ったことも領けよう。

普段からあまりこういう「啓発促す系」の本は手にしません。ビジネス書しかり長らく読んでいられないという傾向がありまして、そのうえ背中を見て育て精神にあこがれているゆえに、本はフィクションが一番好きなわたしなのです。

ただし、なぜかこれは気になった。らしい。もう記憶曖昧、もはやその時に何かしら落ち込んでいたかして、奮い立たせる何かを欲していたとしか思えませぬ。でもそういうヘルプミー状態でもちやっかり図書館で何十人もの予約数にひるむことなくポチっとしてしまったということは、さほど大した何かではなかったのでしょうか。すでに忘れていくわけですし。

ということで、読み始めました。立派な表紙にはおしゃれなイラスト。わくわく感はそれなりにあったのですが・・・何たることか内容にはワクワク感がない。きつとこういうのって、「ああ素敵だな。私もがんばろう」という前向きレッツゴーになりたいときに読み、日ごろの自分を反省し明日に活かす的な効果があるのではなかったのか。

ただ・・・気づきがない。

心の整理したきや部屋を片付けよ、好きな人にはありのままの素直な自分でいけ、安物買いはせず自分の好きなわずかなもので暮らそう、うんぬんかんぬん。

うんうん、知ってる。わかる。存じ上げてる。

それも「わかるううう。そうよねええ」という女子の寒い会話のような反応ではなく、「んー、んー、わかる」という落ち着いたトーンのあれです。いやあ、これこそ年を重ねることの寂寥感なのか。もう少し自分も若ければ、感動の嵐で明日から見違えるような心持ちになれたのか。はなはだ疑問。

しかも少し前の著書とは言え、片付け祭りを散々テレビでやり散らかした後だし、シンプルに好きなものを精神はもう10年来のテーマなのではなかったのか。

挙句、「テレビでこんな話をしているのを耳にしました」ときた。

うそーん。テレビのこと書き始めたら、それはすっかりつぎはぎパッチワーク啓発になってしまうのではないのか。確かに、「なるほど」と思えるのは本や偉人の言葉などばかりでした。それを知れただけでも十分なのだろうか。でもいろんな人のいろんな言葉をここぞというときに引用できるというのも立派な才能かとは思ふ。

それにしても、ご本人を存じ上げないせいかさっぱり心に響かずにまいてしまったのだった。たぶん本人の魅力込みで読めばまた違う感想があっただろうに、やっぱりわたしには啓発本は重

い重い存在なのでありました。

いや、待てよ。

もしかして今自分が10代だったとしたら、もう少し感じ方が違っていたかもしれない、と思うと「本って巡り会いなのね・・・」と美しく締めくくりたくなるのであった。

イチゴの表皮3

<http://p.booklog.jp/book/94575>

著者 : LULU

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/luludiary/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/94575>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/94575>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ